

パブリックアクセスと市民メディアの交差

石井 和平

社会情報学部主催の「社会情報調査の方法に関する研究会」も、今回（2003年3月14日開催）で17回目を数えることになった。今回のお二人のご講演テーマを一言で言えば、「市民による情報発信の可能性」ということになる。

まず、吉村卓也氏からは、「シビックメディアと新しいジャーナリズム」というテーマで、ご自身が理事を務めるNPO法人「シビックメディア」における活動を中心に、市民による情報発信の現状と今後について語っていただいた。同法人は、札幌市が提供するWebサイト「ウェブシティさっぽろ」と、インターネット市民放送局「そら色ステーション」を運営し、そこで、市民が地域の問題を取材し発信する試みが続けられている。市民自らが情報のコンテンツを作り発信することの意義を、実際の活動内容を紹介しつつ、分かりやすく説明していただいた。インターネットを舞台にした市民主体の「ジャーナリズム活動」を支援・実践する「シビックメディア」活動のさらなる発展を期待したい。

次に、津田正夫氏からは「地域市民からの発信の可能性と課題—日本型パブリック・アクセスは可能か—」というテーマで、「パブリック・アクセス」の事例を中心に、今後の可能性を語っていただいた。「パブリック・アクセス」は、市民による地域放送媒体を意味するだけではなく、それは地域の自治活動や教育実践活動、また多文化主義を保障する理念として象徴的な意味を持ち得るものだ。

欧米の「パブリック・アクセス」の実践事例は、また急速にメディアのデジタル化が進む今日の日本においても学ぶべき手本となる。

ところで上で述べたように「パブリック・アクセス」は、「市民による情報発信」の、一つの基本原理を示すだけでなく、その保障を求める理念的な概念とも言える。他方、情報テクノロジーを駆使した「シビックメディア」による様々な情報発信活動は、「パブリック・アクセス」の理念の最新の実践例であり、また理想的な姿と言えるものだ。ある意味、理念としての「パブリック・アクセス」は、「シビックメディア」のような地域のNPOの実践活動によって、完全に具現化したとも考えられる。

だが、市民による市民のための情報が、市民ジャーナリズムの実践活動として、あるいは市民の正当な意見の公開の場として、質的に高いものを、また信頼に足るものを必ずしも提供できるわけではない。「パブリック・アクセス」として保障された回路を通じて、時に猥雑で無意味な情報が流れ、また独りよがりのイデオロギーが徘徊する場合も多い。それは、繰り返し述べているように「パブリック・アクセス」が、市民による情報発信を保障するメディアであり、かつその理念であって、その質や真偽を問うものではないからである。情報技術の発展、特にインターネットによって、完全に市民に開かれ、互いに平等な立場で自由に情報発信ができるようになったとしても、それは技術的に「市民による情報発信」が保障されたことを意味する

だけであって、その「質」や「真偽」を問うことはできないのである。むしろ、ケーブルテレビなどの限られた資源に「パブリック・アクセス」の理念を注視し得えた時代とは異なり、現在は、インターネットの普及によって、「信頼に足るもの」と「信頼できないもの」との境界が曖昧になり、また「意味ある情報」が「無意味な情報」によって隠蔽されてしまう事態が生じているのである。

「パブリック・アクセス」の究極の形とも言える、このインターネットを介した「市民による情報発信」は、そのために、実際には「求める情報」へのアクセスを困難なものへと変えるバリアにもなり得る。ここに、インターネット上に、第三者を介した編集・統合・篩い分け作業が求められる所以である。例えば、米国で普及しつつある Blog (web log) が、日本における「日記サイト」との形態上の類似性から語られる一方、実際には、その本質がジャーナリズムにある点は、

もっと強調されてもいいであろう。日々生成される無限とも言える情報の中から、Blog のサイト運営者は、専門家の立場から有意義な情報を抽出し、コメントを付加することによって、その他の専門家ではない「一般市民」に適切な情報を提供する。Blog の登場とその普及は、その意味で、「市民による情報発信」の限界を明らかにすると共に、「パブリック・アクセス」の新たな意味と可能性を問うものでもある。

理念としての「パブリック・アクセス」とインターネットのような物理的環境としての「市民メディア」の交差点には、Blog に見たように、情報に関する新たな交通標識が求められる。今回の研究会は、「市民による情報発信」の理念と実践を改めて確認すると共に、また新たな課題を見出すことができ、誠に貴重な機会となり得た。ご多忙なところを、本学部で講演して下さったお二人に、心から感謝したい。